

Connecting the dots

李 相逸 (イ サンイル) [✉]

北海道大学大学院工学研究院・環境工学部門・環境人間工学研究室

簡単な自己紹介をしておきたい。出身は韓国で、1980年1月生まれである。2006年3月に1~2年くらいの予定で来日したが、今数えてみるともう16年目で驚いた。2014年に九州大学で博士号を取得し、2017年12月から北海道大学大学院工学研究院の教員(助教)として働いている。最初このエッセイを依頼されたとき、何を書けばいいのか全く思い浮かばなかった。私に自慢できるほどの業績はない。また、ドラマチックなストーリーもない。このエッセイでは思いつくことを淡々と述べてみたい。

2006年3月、無計画で来日した。子どものころから計画を立てるのが苦手で、今も相変わらずだ。ギャンプルは嫌いだが、自分の身を未知な世界に投げるとどうなるのかに興味があった。大した夢や計画はなかったが、若さに甘えていた(当時は26歳)。失敗したら他のことに挑戦すれば良いと思っていた。突拍子のない話だが、人生を高次元の世界から観察すると過去、現在、未来が同時に存在し、一つの塊に見えるだろう。自分の人生で無関係と思われる人生の軌跡はすべて繋がっているだろう。私は現在、主にヒトの非視覚的作用を考慮した室内の光環境について研究しているが、大学では工業デザインを専攻した。あまり接点のないように見えるが、私の人生ではとても繋がっている。

私はなかなかの方向音痴で、よく道に迷うことがある。人生の経路でも方向音痴で、まっすぐな道を歩めばいいのに、色々なところに寄り道したり、道に迷ったりすることが多い。川の橋を渡ればいいのに、あえて泳いで渡ろうとする習性があった(最近はそうでもない)。要するに、安全で速い方法があるけれど、時間がかかるかもしれないが何かもっと経験できる道を選んでしまう性格だった。このような性格で失うものも多かったが、得たものも多い。そして、自分の器はそこまで大きくないことに気が付いた。何かを手にするには他の何かを捨てる必要があった。そのせいか、たまには人生の岐路で極端な意思決定をしなければ

ならなかった。

私は高校生のとき、一切悩まず理系を選んだ。叔父の影響を受け、飛行機の設計者になりたかった。しかし、私は叔父ほど賢くなかった。結局、進路を工業デザイナーに旋回した。ただ一つの問題があった。デザインを専攻するためには美術大学に進学する必要があった。当時の韓国の入試規定では、理系の学生は芸術向けの大学試験を受けることは許可されていなかった。文系を選ぶべきだった。担任の先生に事情を説明すると、「わかった。君の夢を応援しよう。」との答えが返ってきた。後から聞いたが、前例がなく、関連手続きがかなり大変だったようだ。紆余曲折の末に私は1998年より大学で工業デザインを専攻することになった。

大学ですぐに気づいたことがある。私は、それなりのアイディアは出せるが、デザインのセンスが比較的欠けていた。そのころ、国から手紙が届いた。兵役徴収命令書だった。人間以下の扱いをされながら兵士に育てられた。人間は適応の動物、慣れれば軍隊も喜怒哀楽を感じられるところだった。しかし、1000万円もらえと言われても二度と戻りたくない(10億円だと考えてみる)。話がそれだが、永遠に終わりそうになかった26か月の兵役が終わり大学に戻った。大学では新しい先生が着任し、人間工学という講義が開設されていた。元々理系だった私にはとても興味深い授業であり、デザインするにあたってヒトを知ることが必須だと感じたのだ。残念ながら、所属学部で人間工学を研究する研究室は存在せず、授業も1学期で終わってしまった。しかし、この授業は私の人生に大きな影響を与えることになる。

大学4年生の時からデザイン事務所で働く機会があった。零細な企業で、私が大学を卒業するころ(韓国は2月)はいつ潰れてもおかしくなかった。給料も貰えなくなり、3月に会社を辞めた(もちろん退職金はなし)。そのころ日本(下関)に住んでいる友達のところ遊びに行った。主に福岡、北九州、下関など

✉ si.lee@eng.hokudai.ac.jp

の地域を旅行した。日本人の生活をのぞいてみたところ、日本と韓国は似ているようで、何かが違った。未だにうまく説明できないが、(日本語も全くわからないのに)日本で生活してみたいと思った。その場で、友達が日本語を学んでいた施設に足を運んだ。友達の通訳で関係者と相談したところ、(もう3月なのに)4月入学にまだ間に合うと言われた。急すぎる話だったが、このチャンスを逃したくなかった。帰国後、すぐに親に相談した。全く計画も目標もないにも関わらず、反対もせず、「やってみなさい」と応援してくれた(とても感謝している)。旅行から韓国に帰って1週間の準備後、再び日本(北九州市)にきた。最初はコンビニに行くのも怖かった。割り箸は何膳必要か、ビニール袋は必要かなどを聞かれていたと思うが、何でも「はい」と答えていた。

日本語学校では今後の進路についてしつこく聞かれていた。そもそも無計画だったので、のんびり日本語の勉強をしているだけだった。偶然にもデザイン専攻の先輩が福岡で留学中であることを知った。天神のラーメン屋で豚骨ラーメンを食べながら、先輩に人間工学に興味があることを告げると、その先輩は九州大学で人間工学を研究していると答えた。以後、私の進路は、九州大学になった。

研究生として所属した研究室ではヒトの心について研究していた。脳、心臓血管系、自律神経系、免疫系、ホルモンなど、あらゆる生理指標を測定していた。デザインを専攻した私にはさっぱり分からない世界だった。2年間の修士課程じゃ何もわからないと思ったので、博士後期課程への進学を決心した。ヒトの心を研究し、デザインに適用しようとしていたわけだが、ヒトの心を定量化することはとても難しいことだっ

た。当時の私にはよりクリアなアウトプットが欲しかった。D1が終わるころ、私は完全に行き詰っていた。毎日博士の学位をあきらめる理由を考えていた。そのころ、「一緒に光の研究をしてみないか？」との誘いの声がかかってきた。少なくとも私にとっては砂漠のオアシスのような救いだった。これがきっかけでD2から研究室が変わり、ヒトのメラノプシン遺伝子の一塩基多型(Ile394Thr)が光反応性に及ぼす影響について研究することになった。この研究より時間生物学会との縁が始まった。

以上が今の私に至るまでの経緯である。すべてが必要だったプロセスだったと思うし、繋がっているように感じる。また、無謀な私に助けの手を差し伸べてくれた恩人に恵まれていた。彼らにはいつも感謝している。修士課程の指導教員に、「何故私を助けてくれるのですか？」と聞いたことがある。「私も誰かに救われて今ここにいる。君も将来、困った後輩を助けてくれ。」と先生は答えてくれた。私も誰かにとってそのような存在になりたい。

何かで困っている20代の後輩たちへ

失敗すると辛いし、わざわざ経験したいとも思わないが、失敗を通して成長すればそれでよいと私は思っている。これまで様々な失敗を経験してきたが、そのたびの恥はおまけである。しかし、心配はいらない。ほとんどのヒトは他人のことにあまり関心を持たない。「失敗を恐れてはいけない」のような古臭い話がしたいわけではない。失敗は何か新しいことを始めると必然とついてくる意地悪な友である。嫌でも付き合わなければならない存在だ。失敗くんとどのように付き合うかは各自が決めれば良い。